

[講演要旨] 島原四月朔地震(1792)と島原大変 - 2

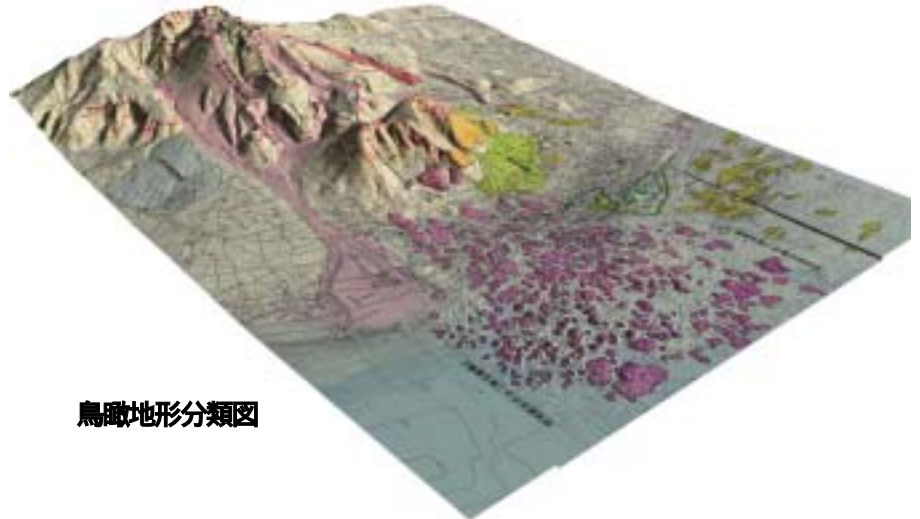
国土交通省雲仙復興工事事務所 古賀 省三, 村上 博
日本工営(株) 井上 公夫, 角谷ひとみ, 今村 隆正

1. はじめに

井上・今村(1997)は、島原市で1997年に行われた歴史地震研究会で、島原四月朔地震(寛政四年,1792)と島原大変について報告した。その後、島原大変の地形変化について、表現方法を工夫し、立体的に分かりやすくするとともに、いくつかの新しい事実が判明したので、その2として紹介する。

2. 鳥瞰地形分類図から見た島原大変

島原仏教会(1992)によれば、眉山(前山)は雲仙普賢岳(奥山)の手前にあるという意味で、七面山と天狗岳の総称であり、島原大変は南側の天狗岳が大きく山体崩壊を起こしたものである。鳥瞰地形分類図は、国土地理院(1998)の沿岸海域地形図を基図に写真判読した地形分類図(井上,1999)をもとに、南東方向からの鳥瞰図としたもので、平成(1990-95)の雲仙普賢岳噴火と寛政(1791-92)の噴火と山体崩壊の状況が良く分かる。陸域の地形数値データは1/2.5万の北海道地図(株)のデータ、海域は国土地理院が1996-97年に行ったナロービーム音



鳥瞰地形分類図

響測定システムによる海底地形調査(丹羽,1998)のデータを使用した。また、前回示した島原大変前後の鳥瞰図に海底地形を入れるとともに航空写真を貼り付けて、大変前後の地形変化の状況を比較できるようにした。

3. 伊能忠敬による島原大変20年後の地形測量

伊能忠敬(1745-1818)は、第8次測量(九州2次)で島原大変20年後の文化九年(1812)に地形測量を行っている。この測量原図を伊能忠敬記念館で撮影させてもらい、島原市の1/1万地形図に転記した。測量原図によれば、大変20年後の城下町の復興状況や流れ山の状況が克明に測量されている。流れ山には島の名前が書かれており、現在では海中に水没して見えなくなっている流れ山も存在する。また、詳細な測量日誌やスケッチ図(未整理)も残されており、沿岸海域土地条件図(1998)と比較することにより、当時の状況がより克明に復元できるであろう。

4. 大岳地獄物語と災害復興過程

「大岳地獄物語」は、神代鍋島領西里名思案橋(現在の国見町神代西里)の与次兵衛という一農民が検分したことを詳細に記した史料である。神代は島原半島北部で肥前の鍋島藩との交易の港町であり、与次兵衛は島原街道を通過した人々から情報を集めやすかったのであろう。当時は武より文に重きが置かれており、島原でも寺子屋が多く開かれていた。一農民の与次兵衛もそういった時代背景を生きた一人だった。本史料の記述は、1791-99年まで及んでおり、1791年8月には前駆地震に関する記述がすでに見られる。さらに火風(火砕流)や山潮(土石流)発生についても記載されている。三月朔地震(1792.4.21)の直後には、殿様や島原城下町の人々は他所へ避難したが、地震も収まり多くの人々が帰宅して、四月朔地震(1792.5.21)と眉山崩壊に直面し、津波被害を含めて1万5000人にも達する死者・行方不明者を出してしまった。

避難・救援活動については、佐賀・鍋島支藩の神代領へ避難した者へは、米だけでなく味噌や薪まで支給され、藩を超えた救助活動が行われていた。また、災害復興工事例として、白土湖の堀割工事のことも記載されている。1792年11月に開始された工事は「三十三ヶ村の者二万人寄せてようやく道の出来るほどになる」と記載され、工事着工から半年後の1793年5月にやっと完成した。

5. むすび

三月朔地震の直後に、眉山の直下で「楠平の地すべり」(南北720m,東西1080m,滑落崖90m)の発生と地下水位の急上昇があったことが知られている。このことに為政者(当時、殿様は病弱であった)が気付いて警戒・避難対策を取っておれば、これほど多数の犠牲者を出さずに済んだのではないかと悔やまれる。今後もさらに多くの資料を整理しながら、大規模な地形変化と大災害との関連を追究して行きたいと考えている。

なお、雲仙復興工事事務所より、英文パンフ『島原大変 The Catastrophe in Shimabara, The 1791-92 eruption of Unzen-Fugendake and the sector collapse of Mayu-Yama』(24pp.)が2002年10月に発行されています。